

「『身近な仏教用語』に学ぶ真宗入門」

万行寺住職・東京仏教学院講師・NGOアーユス理事 本多靜芳

「10110八年月111日（土）

第五回 「平和を生み出すのは祈りかゝ桃太郎から考える【一水四見】」

はじめに～共通感覚

・八月十五日…何と呼ぶ日か？ 久米宏さんのサイト「ノックノック」 2020-08-05Kume*Net

同じ出来事…まったく違つて見える 何故か？

・「時代の共通感覚」のメルクマール（判断基準）

・CCR『雨を見たかい？』

一、桃太郎～諸法無我

・テーマ「しあわせ」 日本新聞協会広告委員会最優秀賞 「めでたし、めでたし？」

・諸法無我—すべては他の存在との関わりで成り立つ

—自分の都合でモノゴトをとらえ、相手の立場を考えることができない
—そのものの見方で、相手を傷つけ、自分も振り回されている

—それ以上ものを考えなくなる甘えた自分がいる

仏教
—自分の姿を教える

淨土真宗—念佛は私に「気づけよ、目覚めよ、身の程知れよ」と呼びかけ
私の生き方を根底から、それでいいのだろうかと、搖さぶりかける



二、一水四見／私は何を見ているか　拙著『「心を豊かにする」62のヒント』ゴマブックス

・唯識^{ゆいしき}という学び

一水^{いつすい}　同じ水

四見^{しけん}　畜生^{畜生}　魚（水の中の生きもの）——「棲みか」

　　——餓鬼^{餓鬼}　貪り^{貪り}　炎の燃え上がる「血の膿」

　　——人間^{人間}　——「飲み物」

　　——天人——天から見える地上の池の水＝「宝石で出来た鏡」

　　その立場、その人の心の動き——まったく違つて見える、現実に違うものに見えている

「手を打てば　鳥は飛び立つ　鯉は寄る　女中茶を持つ　猿沢の池」

「世の中には、なんて沢山の妊娠さんがいるんだろう、と自分が妊娠してみて、はじめて気づきました」

　　自分の関心に合わせて見ていた、自分の都合でものごとは見えている

よしあしの文字をもしらぬひとはみな　まことのこころなりけるを

　　善惡の字しりがほは　おほそらごとのかたちなり　正像末和讚『註釈版聖典』六二一頁

・お寺の掲示板「憎い人など　一人もいない　憎いと思う　私がいるだけ」

一九七一年ヒット曲「あの素晴らしい愛をもう一度」

　　あの時　同じ花を見て

　　美しいと言つた二人の
心と心が　今はもう通わない



三、分かつていないことのわからなさ／善と悪

七高僧—中国の曇鸞大師（四七六～五四二）『往生論註』

蟪蛄けいこ春秋しゅんじゅうを識しらず、伊虫いちゆうあに朱陽しゆようの節せつを知らんや 「信卷」『註釈版聖典』三〇一頁

蟪蛄—蝉せん 夏に生まれ、夏に死んで行く—春も秋も知らないという故事
—伊虫、この虫、蝉—朱陽、夏そのものを知つていると言えるだらうか

蝉は、夏とは違う春や秋を知らない→本当は、夏ということも知らないという事実 たとえ話
—人間も、迷いの世界、自己中心の生き方しかしていない
↓自分の生きている世界、自分の生きている姿も分かつていないと云うのです。

いまの自分の生き方とは違う、生き方がある—ということに気づいていない

世間の常識と仏教・浄土真宗の教え

世間の常識と自分が大切にする仏教の教え—まったく同じか？

世間の常識と仏教の教えがまったく同じなら→わざわざ仏教を学ぶ必要はない
自分が仏教を学び、これこそ本当のよりどころだと実感できたとき
仏教の教えと世間の常識が同じでないなら→当然、私自身の中に葛藤が生まれる

この葛藤を通して「心」が育つと教えている

仏教の善とは：惡を避けること—十善とは、不十惡身体し言葉ごんの三業（身・口・意）

十惡二殺生・偷盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・愚痴

↓平和を生み出すとは？ 善が、不十惡なのだから…
↓戦争に向かわない生き方—不戦、非戦、非暴力…：



四、『親鸞と戦争を痛む』

龜井鑛先生『親鸞と戦争を痛む』大法輪閣、九五頁、一九九八年刊行。
「仏の国に軍兵無用（戦時に戦争反対した仏者たち）」

国歌總ぐるみの苛酷きわまる思想統制が布かれる中で。かつての国をあげての迷妄流転は、千幾百年を過ぎたついこないだ騒（さわぎ）でも、同じく国をあげての妄執流転の中で、われら民衆は呻吟し、悲痛して、われとわが生命を屠つて屠つて、今に目覚めることがない。
そんな中で、仏法を学び、仏法を信じ、仏法に生きる依り所を托する仏教者念佛者の中に、仏教の信念から、戦争を誤りと難じ、軍隊を無用と批判してはばからぬ人がいた。

・仏法では戦争は悪事 『無量寿經』「ひようが むよう兵戈無用」

岐阜県不破郡の真宗大谷派明泉寺の先々代、竹中慈元住職（昭和二〇年七九歳没）だ。

・ひるまず非戦主張

その人となりは謹厳廉直。酒はほとんどしなまず。胃弱だったので食事は時間をかけてよく噛んで食べたという。勤行は朗々として悠揚迫らず、法話はおおむね小難しいが、情味がこもり、坐臥つねに泰然自若といった風があつた。

・天照大神も迷いの凡夫

一民族信仰の枠をでない神である限り、相対有限の存在であり、迷界を出ないと言うべきは当然だろう。仏教以前のインド・バラモン教の蛮神と同類なのだろう。初出 月刊『大法輪』平成七年十一月号

まとめ 戦争に対して非戦、非暴力が貫かれる

世間の常識と仏教の教えの葛藤に生きる→こうしろという話ではない——私は、これでいいのかという心祈りだけでは平和は生まれないが、仏教をより所にした祈りなしには、平和への歩みは生まれない

